

聖書：使徒 16：11～15

説教題：主が心を開いて

日時：2014年3月23日

パウロの一行はトロアスからエーゲ海を船で渡ってヨーロッパへとやって来ます。前回、パウロたちは神の御心が分からなくて右に行ったり、左に行ったりし、強いられるかのようにして小アジアの西端トロアスに着きました。しかしパウロは幻の中で「マケドニヤに渡って来て、私たちを助けてください」と一人のマケドニヤ人が懇願するのを見ました。そしてシラス、テモテ、ルカと話しい、「神が私たちを招いておられる」と確信して出発します。11節を見ると、トロアスからネアポリスまでかかった日数は二日間でした、後の20章6節を見ると、同じルートを反対から進んだ時は5日間かかりました。ですから今回はいかに順風のもと、スイスイ進んだかが分かります。そうしてパウロたちはマケドニヤ地方の第一の町ピリピに到着します。この町は紀元前4世紀にマケドニヤの王フィリッポス2世が自分の名前にちなんで名付けた町でした。そして紀元前1世紀にはオクタヴィアヌスとアントニウスが、ブルートス、カシウスらを破った古戦場の近くの町でした。そして勝利したオクタヴィアヌス、すなわち初代ローマ皇帝となる彼が、この町を拡張してローマの植民都市としたのです。特にこの町には退役軍人が多く住みました。そのため、ローマ色が非常に濃く、小さなローマがマケドニヤに移って来たかのような町となっていました。

このためでしょうか。パウロたちは通常、新しい地ではまず大都市に行き、ユダヤ人の会堂から宣教を始めましたが、このピリピにはユダヤ人の会堂がなかったようです。堂を建てるには少なくとも10人の男性会員が必要とされましたが、その人数も確保できないほど、ユダヤ人が少なかったのでしょう。パウロたちは最初の安息日までにユダヤ人と知り合いになることができず、会堂がない場合に青空礼拝を行なっているであろう川岸を訪ねて歩きました。そしてやっと細々と集会を守っている群れを見つけたのです。しかしそこにいたのは女性たちばかりでした。パウロは幻の中に出て来たマケドニヤ人をイメージしながら歩いたでしょうが、その想像とは大いに異なる状況しか、彼の前にはなかったのです。彼はそこに腰を降ろし、集まった女の人たちに福音を語ります。すると、それほど重要とは思われなかったその小さなチャンスを用いて、神の大きな意味のあるわざがなされて行ったのです。14節：「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。」

まず注目したいことは、このルデヤの回心において「主は彼女の心を開いて」と言われていることです。すなわちここに救いにおける神の主権が語られています。ルデヤが信仰に入ったのはパウロの言葉が巧みであったからではありません。あるいはルデヤが理解力のある人だったからでもありません。ここに起こったことは主のわざでした。主が彼女の心を開いたことによってルデヤはパウロの言葉に心を留め、福音の真理に目が開かれ、イエス・キリストへの信仰告白へと導かれたのです。

この「主は心を開いて」という言葉で思い起こすのは、イエス様が復活された日に、エマオ途上を歩いていた二人の弟子の話でしょう。彼らはイエス様と一緒に歩きながら、目の前にい

の方がイエス様とは分かりませんでした。救い主がそこにいるのに、暗い顔をして歩いていました。しかし目が開かれた時に、「イエス様だ！」と分かりました。また同じルカ 24 章でイエス様は弟子たちに現れ、「聖書を悟らせるために、彼らの心を開いて、こう言われた」と記されています。その時、彼らは旧約聖書の様々な言葉が実はイエス様を指していたということを目からうろこが落ちるようにして知ります。ですから私たちは聖書を理解しようとする時、自分の生まれながらの能力や知恵で理解できるかのように思ってはならないのです。堅く閉じているこの心を主が開いてくださらなければ、神の真理を悟ることはできないのです。そして自分が学ぶ時だけでなく、誰かに福音を伝える時もそうです。私のテクニックや感動させる話が人を回心させるものではありません。カギは主が持つておられるのです。主が働いてくださらなければ、どんな人間の働きも虚しいのです。ですからこのことを知る私たちがなすべき第一のことは、まず主権を持ちたもう主を見上げて祈るということでしょう。人を救うことができるのはただ神なのです。

しかし今のことは、私たち人間の側の責任をいささかでも減じるものではありません。14 節を見ると、主は彼女の心を開いて「パウロの語る事」に心を留めるようにされたとあります。つまりパウロが語ることなしに、主の働きは現れなかったのです。近代世界宣教の父と呼ばれるウィリアム・ケアリが東洋宣教の必要を訴え、自らの召命を証した時、先輩牧師はこう言ったそうです。「お若い方。まず座って落ち着きなさい。神が異教徒を回心させようとなさるなら、君たちや私の力など借りないでそれをなさるだろう。」と。一見これは神の主権を気高く告白する言葉のようですが、実際は聖書から外れた言い方です。神は聖書の中で、全世界の人々に福音を宣べ伝えるようにと命じています。ローマ書 10 章 14 節：「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。」ですから私たちは福音を語らなければなりません。しかしそれを用いて人を救う力は主が持つておられるのです。ですから私たちは主権を持ちたもう主により頼んで、宣教の働きに当たるべきです。むしろ私たちは主が主権を持つておられることを仰ぐので、望みを抱いて福音を語り続けるのです。私にその力はなくても、主にそれは可能であると仰ぐからこそ、私たちは粘り強く宣教の使命に励むことができるのです。

この結果、ルデヤという女が主を信じます。彼女は「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う人」でした。紫布は高級品で、王侯や貴族が好んで使うものです。ですからそんな商品を扱うルデヤもかなりの資本を持つ裕福な人だったのでしょう。彼女の出身地テアテラは小アジアにある町です。彼女はそこからより大きな市場を求めてヨーロッパへやって来た積極的・行動的なキャリア・ウーマンであったと言えます。その彼女が福音に応答したのです。パウロは何も彼女めがけて福音を語ったのではなかったと思います。他にも女たちがいました。しかしその中の彼女がパウロの語ることに心を留め、信仰に入り、大きな働きをするようになったのです。ここに素晴らしいメッセージがあるのではないのでしょうか。パウロが最初、この町に入って来て、福音宣教の機会を伺っていた時は、あまり状況が芳しくありませんでした。期待に胸ふくらませて、この地方第一の都市にやって来たのに、会堂は見当たらず、女性たちに話しかけることしかできません。ここに来たことに何の意味があっただろうかと思われるような状況でし

た。しかし一人の女性が回心へ導かれ、そこから大きなみわぎが始まったのです。このことはいかに私たちが小さなチャンスを大事にすべきかを教えているのではないのでしょうか。あまり重要とは思えない小さな事柄、あまり重要とは思えない目の前の一人を通して神は私たちが予想していなかった新しい展開を導いてくださるのです。ですから私たちは小さな事に忠実であるように、と励まされるのです。

主によって心を開かれたルデヤが、どのような姿を示したかを 15 節から短く 3 点、見たいと思います。第一は彼女は主イエス・キリストを信じたということです。先に主が私たちの心を開く主権を持っていること、そしてそのことは語る者の責任を少しも減じないことを見ました。それと同様、これは聞く者の責任をも少しも減じるものではありません。時々、人の心を開く主権は主にあると語ると、では主が私の心を開いてくださるまで私は待っていきましょう、とまるで他人事のように語る人がいるものです。しかし聖書はすべての人に向かって、信じなさいと命じています。すなわち悔い改めて福音を信じる責任が私たちにあるのです。私たちは主の恵みを祈り求めつつ、自らが悔い改め、信じることへと進んで行かなければなりません。

二つ目に信じた彼女はバプテスマを受けました。信仰を持った人は、バプテスマを受けるとするのは通常のことです。洗礼は神が与えてくださる救いのハンコのようなもので、これによって弱い私たちの信仰は大いに強められ、祝福されます。その際、ルデヤの家族もバプテスマを受けたとあります。後に 31～34 節でも家族洗礼のことが出て来ますが、ここからも分かることは、聖書が述べる救いは単に個人個人の世界ではないということです。神は旧約時代から「あなたとあなたの子どもたち」と語って来られたように、家族というつながりをご自身の恵みが注がれる通路として用いて働かれるのです。ルデヤが信仰に入った時、その家族も信仰に入り、そこにいたであろう幼子たちも洗礼を受け、主の祝福にあずかったのです。

そして何と言ってもこのルデヤが示した応答の特徴は、彼女が「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」と願い出て、自分の家を福音宣教のために提供したことでしょう。16 章 40 節から、彼女の家はピリピ宣教の拠点として使われ続けたことが分かります。なぜルデヤはこのような応答をなし得たのでしょうか。これは「主が彼女の心を開かれた」こととの関係で考えられるべきことではないのでしょうか。「主によって心が開かれる」とは、何よりもイエス・キリストのことが本当に良く分かるということです。主が私の救い主であること、主が私のために十字架にかかってくくださったこと、その主の愛が迫るようにして分かることです。そのように心開かれてキリストの愛を知った人は、必ずその愛に応えずにはいられなくなるはず。自分の持てるものすべてを持って、主の愛にお答えしたいとの願いを持つはず。これは心を開かれた人の自然な姿であるということです。

ある人はこれを見て、主に心開かれることは大変なことだと思いかもしれません。この導きをいただいたなら、ルデヤのように歩まなければならなくなる。だからまだ今はあまり心が開かれない方が良いでしょう。天に召される日が近くなった頃がいいと思うかもしれません。しかしもちろんそれはおかしい考えです。イエス様は、天の御国は良い真珠を探している商人のようであり、素晴らしい真珠の一つ見つけた者は、持ち物全部を売り払ってそれを買ってしまう、と言われました。素晴らしいものを見出した人は、それと比較して今持っているものがどうでも良くなり、それをより素晴らしいことのために使うことを喜びとします。ルデヤもここで喜びを

もってそのことを行ないました。そしてこれこそ聖書が述べている賢い投資です。消え行くこの世のものを永遠に残ることのために使うという最も賢い使い方をしています。彼女はこれによって、実は自分の将来のためになることをしているのです。これは主に心を開かれた者が、その具体的生活において結び始める実なのです。

パウロはこの彼女に接してどう思ったのでしょうか。15 節の最後に「強いてそうさせた」とありますが、これはルデヤの主に対する熱心な愛を表現しているものでしょう。パウロはこの姿に接して、感謝したに違いありません。パウロ自身、心開かれて主に応答し、すべてをささげて歩んでいた人でした。しかしここにもこういう人が与えられました。主が彼女の心を開いて、彼女をこのように導き、この彼女を用いて大きな働きを進めてくださるのです。

私たちはルデヤの姿に改めて教えられます。真に心を開かれて主を知った人は、このように応答するのだということ。そして彼女を見る時、私たちは自分自身もさらに主によって心が開かれることを求めるべきであると思わされるのではないのでしょうか。さらに心開かれて、主をもっとはつきり見、彼女のように主を愛する者とならせてくださるように、と。主は私たちが語る福音を通して、さらに他の人々にこの働きを進めてくださいます。私たちはこの主の恵みの働きに期待しつつ、自らがさらに心開かれ、主を愛する歩みへ導かれて、主のみわざと御国の前進のために用いていただく歩みを、主に願ってまいりたく思います。